

〔書評〕

畠中 宗一 著『家族臨床の社会学』

世界思想社, 2000年, 238頁, 2200円.

和泉 広恵

今秋、厚生労働省は、育児休業制度の見直しをスタートさせる。主眼となっているのは、満1才までとされていた休業期間の最長2年までの延長である。今日、出産と仕事の両方を選択する女性が増え、そのライフスタイルをサポートする社会制度が模索されている。育児の主たる担い手という「親」の役割が変化していく中で、子どもの健幸 (well-being) という視点から「家族」と育児の関係を問い直す本書の試みは、現代日本の「家族」のジレンマを鋭く描き出している。

本書は、同年2月に出版された『子ども家族支援の社会学』(以下、『子ども家族~』)と対をなしている。『子ども家族~』では「家族政策」という視点から、本書では「家族臨床」という視点から、議論が展開される。両書によって、子どもの福祉における「政策と臨床の統合」が目指されているのである。

本書は、全3部(8章)より構成される。第1部『「現代社会」と「家族関係」』では、現代の日本社会の特徴が、子どもの養育・家族関係の問題を通して述べられる。第1章では、4つのキーワードによって現代日本の特徴が示される。第2章では、そのような社会での家族関係のタブーについて論じられる。第3章では、今日の養育と家族に求められているものが指摘される。第1部は著者の主張の核心部が示された箇所である。

第2部「私事化する家族問題」では、第1部において示された主張をもとに、家族にかかわる個別の「病理」現象とその「社会的アセスメント」について論じられる。具体的には、子どもの虐待(第4章)、不登校(第5章)、インセスト(第6章)が、採り上げられている。各章において展開される議論は、それぞれの現象の説明に加え、親子・家族の関係、里親・施設養育・施設保育、

現代の子どものおかれている状況、「病理」をめぐる社会規範など、その背景を幅広く問う内容となっている。

第3部「『家族臨床の社会学』の構想」では、1部と2部の議論を踏まえ、「家族臨床」における課題と「社会学」の果たす役割が示される。第7章では、「家族臨床」の基礎として、「健康なコミュニケーション」の可能性が指摘される。第8章では、「家族臨床」に関する学際的な視点の重要性、特に「社会的」視点に加わることの意義が論じられる。第3部は、1部、2部を通して検討された課題に対するひとつの方向性を示す全体の結論部に相当する。

以下では、まず、本書の主張についてみていこう。著者は、現代社会の特徴を4つのキーワードから説明する。すなわち、「富裕化」「情報化」「少子化・高齢化」「高学歴化」である。とりわけ重要なのは「富裕化」であり、第1章において示される〈今日の「家族機能の脆弱化」や「家族問題」の背景には、「富裕化による私事化の肥大化」とそれによる「規範の希薄化」がある〉という主張は、それ以降の議論全体の基底をなしている。

この主張を、少し詳しくみていこう。まず、「富裕化」は、馬場宏二の「過剰富裕社会」^①と村上泰亮の「経済の高度化が、新しい個人主義を育てる」という議論^②から説明される。この「富裕化」による変化として、特に注目されるのは、家庭内の役割とされていた「家事や育児・子育ての領域」の「社会化」「外部化」である。端的には、女性の労働市場への進出であり、それにとまなう少子化と保育の外部化である。また、「私事化」とは、“privatization”の訳語であり、「プライバシーを尊重するという傾向がより一層強くなること」(『子ども家族〜』pp. 77-78)と説明される。「私事の自由の肥大化」は、自己実現の追求を促し、社会を統制する規範を希薄化させる。規範の希薄化とは、性規範をはじめとするさまざまな社会規範に対する人々の意識の弱体化であり、それは、世代間の摩擦を生じさせ、より若い世代に心理的葛藤をもたらす。

以上の主張は、各章の議論に一貫性をもたらし、前書における「対策」と本書の「臨床」をつなぐ軸となっている。ところで、この主張は、評者にひとつの素朴な疑問を抱かせる。著者は、戦後から今日にいたる日本社会の変遷を「富裕化」と捉え、それにとまなう親密な空間における関係性の変容を「私事化」の拡大と説明する。しかし、果たして、戦後から現代に至るまでの社会の

変化をそのように単純化して論じることはできるのだろうか。

たとえば、「富裕化」による「私事の自由の肥大化」のひとつの例として挙げられるのは、女性の労働市場への進出と、それによる子どもの養育に対するゆとりの喪失である。しかし、女性の労働市場への参入は、「富裕化」とダイレクトに結びついているとは考えにくい。単純にみても、「富裕化」が最も進んだ高度経済成長期には、女性の権利の拡大とは裏腹に、専業主婦の地位が憧れの生活様式として一定の支持を集めていた。また、経済の低迷期である今日、相変わらずM字型を描く女性の就労は、自己実現の手段としてだけでなく、生活苦や将来への不安という側面を多分に含んでいる。このように、就労する女性と専業主婦のバランスは、「富裕化」によってのみ説明されるものではない。

このような議論は、「富裕化」以前の社会を美化する危険性を伴う。むしろ「戦前」の社会では、就労の如何を問わず、女性が（本書の意味で）「子どもに対峙するゆとり」を今日ほどもってはいなかったという可能性は大きい。そもそも、子どもに対する関心が今日とは異なっていたのではないか。だとすれば、「富裕化」と今日の状況を接続するためには、他の説明変数が必要となるだろう。したがって、「富裕化」「私事の自由の肥大化」「子どもに対峙するゆとりの喪失」の三者の結びつきについては、今少し必然性を示す議論が求められるように思われる。

「規範の希薄化」についても、類似する疑問が生じる。本書の指摘のように、現代社会では、「戦前」よりも自己実現の追求が重視される傾向にある。そのなかでは、自己の欲求と公共性が対立する場面も多い。けれども、たとえ自己実現と真っ向から対立するような「戦前」の規範が薄れているとしても、「規範」自体が希薄化しているとは言えず、以前とは異なる「規範」が今日の社会に生じていることも考えられる。

本書によれば、世代を追うごとに規範が希薄化しているため、規範を重視する親世代と次世代の価値観にギャップが生じ、さまざまな子どもの問題が起こるという。たとえば、不登校の背後には、「富裕化」に囚われ、ゆとりを失いストレスの多い生活を送る教師・親世代の価値観と、それを共有しきれない子ども世代の価値観のずれによる子どもの葛藤があると説明される。管理的で登校規範を押しつける「古い価値」と子どもの世代の価値との軋轢は、不登校の説

明のひとつとして、説得力をもつ。だが、実際、「規範」よりも「私事の自由」が優先するとされる子どもの世界は、「私事化」が進行する一方で、大人の世代からは想像もつかないほど細分化された「規範」に満ちているようにもみえる。同世代の「規範」からの逸脱は、「いじめ」というサンクションを伴っており、そのことは子どもに大きなストレスをもたらす。このような「規範」による葛藤は、「友人関係」という不登校の重要な一因となっているのではないかとすれば、本書において「規範が希薄化している」と主張される場合の「規範」とは何を指しているのか（「以前に共有されていた価値観」と定義するならば、それが希薄化しているという説明はトートロジーである）、また、それが「私事の自由の肥大化」とどのように結びついているのかということについて、やはり、議論の余地が残されているように思われる。

つぎに、本書の特徴である「家族臨床」という視点についてみていこう。核となる主張を示しているのが第1部だとすれば、第2部と第3部は、具体的な社会問題と「家族臨床の社会学」の可能性について論じられた部分である。家族問題を対象にする社会学的研究は、家族問題の現状とその要因、発生のメカニズムなどの指摘に留まるものが多い。その意味で、「家族臨床」の方向性や「社会学」の貢献までを明示する本書は、実践的な意義を多分に含む研究といえる。特に、第7章の「健康なコミュニケーション」の重要性とそれを可能にする6つの条件は、その具体的な方向性を示すものである。

ここで評者がひとつ気になるのは、コミュニケーション一般と親密な関係性に対する議論が混在している点である。本書では、家族内のコミュニケーションの特性については問われていない。けれども、「家族臨床」を意識するならば、「家族」と一般の人間関係に汎用されるような議論の区別を明確にし、「家族」という空間について、より踏み込んだ議論を行ってもよいのではないだろうか。

このように考える理由は、「家族」が「健康なコミュニケーション」を行うことを困難にさせる空間のひとつであるということにある。家族内のコミュニケーションにいち早く着目したのは家族療法であるが、1990年代以降急速に注目を集めたさまざまな「家族問題」は、それを、「家族」が病理を生み出す装置と

なるというメッセージとして広く浸透させた。暴力の反復や関係性への固執などが、家族内で行われるコミュニケーションと深く関連していることは、繰り返し論じられてきている。こうした「臨床」の対象となるような困難な状況を抱えた「家族」に照準を合わせるならば、「健康なコミュニケーション」の条件を並べるだけではなく、むしろ、そのようなコミュニケーションが可能ではない状況について問うことが重要であると思われる。

また、仮に「健康なコミュニケーション」が達成されている場合には、第2部と第3部の接合という点から別の疑問が生じる。第2部第6章では、インセストについて検討されている。電話相談の事例は興味深いので、少し詳しく紹介しよう。母親とのインセストを経験している18才の男性の事例である。彼は、最初は母親に誘惑されて関係を持ったことを罪悪感として語る。だが、この罪悪感、しだいにインセストがタブー視されていることへの疑問に転化する。彼は訴える。自分と母親は互いを必要としているのにインセストは本当にいけないことなのか、インセストがタブーであるという常識さえなければ、自分たちはこれほど苦しまずに済むのではないかと。

この事例を、第7章の議論に照らしてみると、「健康なコミュニケーション」は、むしろ、スムーズに行われているようにみえる。自己のプライバシーは守られ、母親とのインセストは強制にはみえない。彼は「どう思うか」と相談者に問いかけている。相談者がどのように答えたのか、興味深いところではあるが、母親との関係について、肯定しても、否定しても、いずれの選択にも違和感が残る。（「臨床」とは常にこうした解のない問いを抱える場である。）本書では、この事例は「健康なコミュニケーション」とは異なる観点から考察されている。しかし、「健康なコミュニケーション」の章がこの章の直後に配置されていること、また「家族臨床の社会学の構想」として呈示されていることなどを含めて考えれば、事例との関連性を問わずにいることはかえって不自然であるだろう。そうした場合、「健康なコミュニケーション」は、「家族臨床」の事例に対して、何を説明することになるのだろうか。

以上、大まかには2つの内容についての疑問や意見を述べてきたが、これらは、「家族臨床の社会学」に明るくない評者の的はずれな指摘かもしれない。そ

ここで最後に、評者の関心から、本書の家族社会学における意義について述べておきたい。本書における子どもの健幸とその背後にある家族観には、家族研究に対するある重要な指摘が含まれている。家族社会学では、これまで、「家族」の自明性への問い直しが行われ、「家族」自体の相対化がはかられてきた。このような状況の中で、「抑圧装置としての家族」という議論とも相まって、「家族」の意味が陥穽し、「家族」よりも「個人」、「依存」よりも「自立」が強調されるようになってきている。

だが本書は、それとは逆に、「自立」の背景にある「依存」に着目し、それを受け入れる「家族」の機能に積極的な意味を見出している。詳細な説明は割愛するが、「自立」よりも「依存」が強調されるのは、子どもを中心に議論が行われるためである。子どもは一定の年齢まで、無条件に他者の養育を必要とする。このことは、家族の解体を論じる際にひとつの壁となる。たとえば、「シングル単位」のような議論は、「家族」を参入離脱が可能なものとし、関係性を開いていこうとするのだが、子どものことに話がおよぶと、急に現実性がなくなるように感じられる。子どもの親への「依存」の否定は、「依存」を求める子どもへの「個の尊重」という価値の強要であり、それによって失われるものが多々あると思われるからである。親子関係において、その永続性を否定する一時的な親密さをどこまで肯定することができるのか。それを考えるとき、特定の養育者の重要性を強調する本書の議論には、新鮮さと同時に、現実性が感じられる。

「依存」への着目は、子ども観に関する議論においても意義をもつ。子どもの福祉の領域では、「社会的子ども観」と「私物的子ども観」の対立、里親養育における「養育里親」と「養子縁組里親」の対立など、子どもを「一個の主体」とみることを強調することの是非が争点となってきた。大人と対等な存在として子どもを捉えることは、子どもに能動性を強要したり、親密な空間における過剰な解釈の悪循環を引き起こすこともある。「依存」をキーワードに子どもの健幸を論じることは、子どもの権利をことさら強調する議論に対して、一石を投じることになるだろう。

